4月9日（木曜日）　ダビデ（2）王のしもべ

【新改訳 2017】

Ⅰサムエル記16•13－23

「ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルは彼を非常に愛し、ダビデはサウルの道具持ちとなった。サウルはエッサイのところに人をやり、『どうか、ダビデを私に仕えさせてください。私の気に入ったから』と言わせた。」（21、22節）

この聖句は、サウル王とダビデの出会い、最初のころの関係を述べていますが、王がいかにダビデを気に入ったかがよくわかります。

王は彼を、①非常に愛し、②自分の道具持ちにし、③ダビデの父エッサイにまで頼み込んでしもべにしました。「道具持ち」とは側近の兵とすることであり、信頼を意味することでした。このすばらしい王の思いが、後にまったく逆転することなど、考えられないほどです。

一方、ダビデはサムエルから油注ぎを受け、主の霊が下り、明らかに特別な人物たるべく恵まれても、なお王のしもべとして

仕える生活をしていることに注意しましょう。「神の器」たる人も、しもべであることを学んでいるのです。

～祈り～

主よ。しもべであるよりも主人であることを性急に求める者をあわれんでください。どうぞ「成功症候群」から私を守り、しもべであることを学べる者にしてください。

（学びのために）主は、人をその人にふさわしく訓練し、整えられます。もちろん例外的なケースもありますが、だからと言って、それを一般化することはできません。腕の立つ職人には、多くの場合、長い間の下済み生活と学びの期間があるのです。